

研究ノート

文法からの逸脱—メタ言語的使用の **musts, shoulds, oughts**

井上亜依
(防衛大学校)

1. はじめに

現代英語に観察される新しい現象は、文法規則を考えると説明がつかないことがある。例えば、Inoue (2012, 2013a,b), 井上(2013c)は、現代英語に観察される[前置詞+ (ある要素) +前置詞]の結合から成り立つ語連結が **be** 動詞と共起することで、**be on against, be in and out, be in to** となり、各々独自の意味を持つ定型表現として確立していることを述べた。そして、各定型表現は、機能語から成立しているにも関わらず、**on against, in to** は複合前置詞、**in and out** は複合不変化詞¹ というように、それぞれが文法的範疇を持ち内容語のように振る舞うことを述べた。これは、文法化とは反対の現象である。このように、文法に縛られていると新しい現象の説明はできない。

現代英語の新しい現象は、上記に述べたものがすべてではない。本稿で扱う法助動詞の名詞化もその一例である。現代英語には、**musts, oughts, shoulds** のような法助動詞の名詞用法が観察される。これらの意味は、法助動詞が持つ核となる機能が意識の場に呼び起こされるというようにメタ言語的に使用される。また、**shoulds and oughts, shoulds and musts** のような似た意味をもつ語同士がくっついて定型表現化している例も観察される。

本研究は、意味に主眼を置いた研究のもと **musts, shoulds, oughts** のメタ言語的に使用されるものと、そうでないものの違いを明確にする。

2. 先行研究

本研究が扱う **musts, shoulds, oughts** は名詞であるが、**must, should, ought** という法助動詞がそれらに影響を与えたと考えられる。本節は、**musts, shoulds, oughts** と法助動詞について概観する。

2.1 **musts, shoulds, oughts** についての記述

これまでの先行研究を詳細に調べてみても **shoulds, oughts** についての説明はない。**musts** のこれまでの記述をまとめると、「通例単数 **a must** の形でくだけた形式で使用され、必要なもの、必ず見る・聞くべきの意味」で使用されることがわかる。英英辞典より **a must** の用例を(1)にあげる(イタリックは筆者。以下同じ。訳は省略)。

- (1) a. Good binoculars are *a must* for any serious birdwatcher. (*MED*²)
- b. Warm clothes are *a must* in the mountains. (*LDCE*³)
- c. His new novel is *a must* for all lovers of crime fiction. (*OALD*⁶)
- d. If you live in the country a car is *a must*. (*CALD*⁴)

小西(編)(2006:737)は、「現在、名詞としては、くだけた表現で、通例、不定冠詞を伴い「不可欠なこと[もの]」の意を表す：**Goggles are a must for skiing while it's snowing.** (*LAAD*).形容詞としては限定的に用いられるが、名詞用法よりさらにくだけた表現で使用頻度は低い。また、くだけた表現やジャーナリズム用語で、動詞 **do, see, have, read** などと結びついて「必ずする[見る、持つ、読む]べき(もの)」の意を表す形容詞・名詞を形成する：**this month's must-see film** (*MED*), **The cashmere scarf is this season's must-have.** (*CALD*)」と記述している。

石橋 (編) (1966:267)は、*a must* は新聞用語であり、どうしても載せなければいけない記事の原稿に *must* と書いていたところから起こり、それが 1 つの名詞として取り扱われるようになった、と説明している。さらに、*OED* からの用例をあげて、18 世紀に *no must*, *musts* と複数形で使用されていた、とも説明している。その *OED* の用例を(2)に示す。

- (2) In uttering these *three terrible musts*, Klesmer lifted up three long fingers in succession.
(これらの3つのすごい要件を話しながら、クレスマーは3本の長い指をつづけざまにあげた) (G. Elliot: *Daniel Deronda* [*OED*]; 石橋 (編) 1966:267)

*OED*²には、*must* の名詞形 (意味は必要なもの、本来はアメリカ用法) を記述し、その用例は(3)に示すように複数形の例をあげている (訳は省略。)

- (3) These valuable books are *musts* for you. (1957 R. Hoggart *Uses of Literacy* x. 250)

*SOD*⁶も同様に、*musts* の例をあげ、*colloq.* (くだけた会話) で使用されると記述している。*OED*², *SOD*⁶は *should*, *ought* の名詞用法を記述しており、*should* は「すべきであるもの」と義務を表し、*ought* も同様に義務・責任を表す。

2.2 法助動詞についての記述

2.2.1 法助動詞の種類とモダリティ

法助動詞は Table 1 に挙げるようなものがある。

Table 1 法助動詞一覧

原形・現在形	過去形	分類
can	could	core modal auxiliary (core modal verbs) ² 主要法助動詞
may	might	
shall	should	
will	would	
must	n/a	
ought to	n/a	marginal modals ³ 周辺の法助動詞
used to	n/a	
need	n/a	
dare	n/a	

Table 1 にあげた法助動詞は、2 つの法性 (モダリティ) に大別される。本稿のモダリティの定義は澤田 (2006: 3)に準拠し、「モダリティは、事柄 (すなわち、状況・世界) に関して、たんにそれがある (もしくは真である) と述べるのではなく、どのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。」とする。本稿は、そのモダリティを様々な分類⁴があるが、1960年代後半より最も影響力のあった、かつ広く浸透している分類法、認識的(*epistemic*)と根源的(*root*)に分類する⁵。

認識的(*epistemic*)とは、事柄を (判断・推量の産物として) 「あるがまま」に捉えること (=主観的意味) である、根源的(*root*)とは事柄を (意思・能力・状況の産物として) 「あるべきものとして」捉えること (=客観的意味) である (澤田 2006: 7; Lakoff 1987: 46ff)。

Table 1 で挙げた法助動詞が、認識的モダリティと根源的モダリティに分類した際に、どのような意味を持つのか Aarts (2011: 282ff), Jenkins (1972:72f.)を参考にまとめたものが Table 2 である。

Table 2 法助動詞のモダリティごとの機能

	根源的モダリティ	認識的モダリティ
can, could	能力、中立的可能性、実存的意味	可能性、(否定文で) 知識に基づく結論
may, might	許可	知識に基づく仮定
shall	規則、指示の依頼、義務、意志	未来
should	必要	根拠に基づく過程
will, would	意志、傾向、義務	未来、根拠に基づく予測と結論
must	義務、主語に関する性質、必要	知識に基づく結論、論理的必然性
ought to	必要	該当なし
used to	過去の習慣	該当なし
need	必要	該当なし
dare	予示的	該当なし

3. 実態

3.1 数的調査と質的調査

Table 1 であげた法助動詞の名詞形を Table 3 にまとめた。その名詞形の頻度調査を BNC, WordBanksOnline, COCA を利用して調べた⁶。その結果が Table 4 である。Table 3 の a/the can, cans, a/the may, a/the might, mights, a/the will, wills, a/the need, needs, a/the dare は名詞として独自の意味を確立、needs, dares は動詞として確立しているので Table 4 には列挙していない。

Table 3 Table 1 であげた法助動詞の名詞形

原形・現在形	過去形	分類	考えられる名詞形
can	could	core modal auxiliary (core modal verbs) 主要法助動詞	a can, cans, a could, coulds
may	might		a may, mays, a might, mights
shall	should		a shall, shalls, a should, shoulds
will	would		a will, wills, a would, woulds
must	n/a		a must, musts
ought to	n/a	marginal modals 周辺の法助動詞	a ought, oughts, ought to's
used to	n/a		n/a
need	n/a		a need, needs
dare	n/a		a dare, dares

Table 4 コーパスごとの法助動詞の名詞形の頻度⁷

	BNC	WB	COCA	合計		BNC	WB	COCA	合計
could	0	0	0	0	must	227	276	1007	1510
coulds	0	1	6	7	musts	11	5	60	76
shall	0	0	0	0	ought	1	1	4	6
shalls	0	0	3	3	oughts	7	2	22	31
should	2	0	0	2	ought to's	0	0	1	1
shoulds	8	7	33	48					
would	0	0	0	0					

woulds	0	0	0	0
--------	---	---	---	---

Table 4 より観察される名詞は、*coulds, shalls, a/the should, shoulds, a/the must, musts, a/the ought, oughts, ought to's* である。このうち、*a/the must, musts* については先行研究よりそれらの存在が認められているが、*musts* は辞書の用例に記述されている以外の特徴が見られる。

下記に、*musts* と Table 4 で観察された *a/the must* 以外の名詞の用例をあげる。(17)は *coulds*, (18)は *shalls*, (19)は *a should*, (20)は *shoulds*, (21)は *a ought*, (22)は *oughts*, (23)は *ought to's*, (24)は *musts* の例である。

また Table 4 より、*a/the must, musts, ought to's* は例外として *shalls, coulds, shoulds, oughts* のように法助動詞の複数名詞形もしくは過去複数名詞形になると使用頻度が増す。この理由は以下のように考える。

複数形になると使用頻度が増す理由は、名詞であることを表す指標である *-(e)s* をつけることで、名詞であるということが明確になるからと考える。そして、*-(e)s* をつけて名詞として確立した後、その名詞が誤解を与えずに理解されるよう近くに類似の名詞形が観察される。例えば、(17a)の *coulds* には前方に *maybes* が観察され(COCA では *maybes* は 53 例観察される)、(18a)は *shalls* とともに *shoulds* が用いられ、(18b)は *shalls* と *should* が一緒に観察される。(19)が示すように単数形 *a should* の場合も、(19a)は *a should* の前方に *a want* (ほしいこと)、(19b)は *a should* の後方に *a must* (必須であること) と同じような働きをする名詞が観察される。

過去形になると頻度が増す理由は、現在形の場合、異なる意味を持つ名詞として確立しているが、過去形だと法助動詞が持つ根源的モダリティの核となる機能を誤解を与えることなく反映させることができるためと考える。

Table 4 で観察されなかった名詞形のうち、*a could, a would* は *a could-be leader of his country* (彼の国の将来の指導者)、*(a) would-be writer Nick Carrway arrives in NYC in 1922, an era of loosening morals, glittering jazz and bootleg kings* (小説家志望のニック・キャラウェイは 1922 年のニューヨークについて。その時代は、モラルが失われ、きらびやかなジャズエイジ、密造酒王であった) のように引用実詞⁸として働くものと考えられる。

- (17) a. Castilla held up a hand. “We’ve been over this before, Larry. I’m not going to keep an entire country in the Dark Ages over a bunch of *maybes* and *coulds*....” (COCA, written, 2011)
(カステリヤは手を挙げた。「ラリー、私たちは前にこれについて終えています。多くの「かもしれないこと」や「できたこと」について、暗黒時代の国全体を維持するつもりはありません。)
- b. There was a lot of (complaining) going on. It was like you couldn’t make a mistake without being ridiculed. There were too many *can’ts* instead of *coulds*. (COCA, spoken, 1999)
(引き続きたくさん不満がありました。笑いものにならずに間違いをしないことはないような感じでした。「できたこと」の代わりに多くの「できないこと」がありました。)
- (18) a. Characters in his novels also show an awareness of language. In *Farewell, My Lovely*, the soon-to-be-murdered Lindsay Marriott, using *shalls* and *shoulds* in a formal way, takes offense at Marlowe’s saying he’s not particular about his job “as long as it’s legitimate.” (COCA, written, 2005)
(彼の小説の登場人物は、言語の意識をも表現します。“*Farewell, My Lovely*”では、すぐに殺害されるリンゼイ・マリロットは、形式的な方法で「するつもりである」と「すべきである」を使用し、マーロウの「仕事が合法的である限り」彼の仕事に対して気にしないという発言に対して立腹する。)
- b. Fully conforming implementation of the IEEE standard (all of the “*shalls*” and most of the “*should*”). Full support for both single and double formats. (COCA, written, 1999)
(完全に IEEE 基準の施行に合わせたもの (すべて「するつもりである」でほとんどが「すべきである」) 単一形式と 2 つの形式両方に合わせた完全なサポートです。)

- (19) a. “It needs to be a *want*, not a *should*,” says psychiatrist Tracy Latz, M.D., coauthor of *Shift: 12 Keys to Shift Your Life*, who uses affirmations in her North Carolina practice.
(COCA, written, 2009)
(「必要なのは「したいこと」であり「すべきこと」ではありません。」精神科医で「シフト：あなたの生活を変える12の方法」の共著者であり、それを北カリフォルニアの診療所で使用しているトレーシー・ラッツは言います。)
- b. BOAZ: It might very well.(sic. 正しくは It might be very well.) You know, they start out saying, it’s just a *should*, and then they say, OK, it’s a *must*. (CROSSTALK)
(COCA, spoken, 2002)
(B: それはとてもいいかもしれない。彼らはこう言い始めました。「それはすべきことである」と、そして彼らは「大丈夫、それは必須である」と。)
- (20) a. We can preach about the *shoulds and should nots* of sexual morality. And we can certainly say a lot about abstinence, denial, and sublimation. (COCA, written, 2004)
(性的道徳の「すべきこと」と「すべきでないこと」について説教します。そして、節制、自制、理想化についても必ず多くのことを話します。)
- b. What your skills are, what your abilities are, what you love. Doing what’s right for you, not your *shoulds and your musts*. (COCA, spoken, 2006)
(あなたの技術が何であれ、あなたの能力が何であれ、あなたの愛すること。あなたにとって正しいことをしなさい。「すべきこと」と「しなければいけないこと」ではなくて。)
- (21) a. The bond of marriage creates “a moral ought inherent in the marriage union.” (n104) That “*ought*” is the moral obligation to keep one’s promises, to follow through on one’s commitments. The *ought* is due to the person to whom the commitment is made and so is an interpersonal obligation, but the obligation is more complex because it is more than interpersonal. (COCA, written, 2004)
(結婚の絆は、「結婚共同体に備わっている道徳的義務」を作り出す。この「義務」は約束を守るため、誓いに従うための道徳的な義務である。この「義務」は、その約束を交わした人に与えられるべきもので、個人間の義務であるが、その義務は個人間というところではないので、より複雑である。)
- b. Tell me what is required to make one a better functioning human being, a better neighbor, and a more fully actualized person in a sustainable society and I shall know the *ought*. (COCA, written, 2000)
(持続可能な社会におけるよりよく機能する人間を、近隣を、より完全に現実化された人を作るために必要なものを私に言ってください。その「義務」を私は知るでしょう。)
- (22) a. SCARF: It’s a family that’s filled with what I call ‘*shoulds*’ and ‘*oughts*.’ They do what they should do, what they ought to do, not what they would like to do.... (COCA, spoken, 1995)
(S: それは、私が「主観的にすべきこと」と「客観的にすべきこと」と呼ぶもので満ち溢れた家族です。彼らは、彼ら自身が考えてすべきこと、周囲の状況によるべきことを行い、彼らがしたいことは行わない。)
- b. Kernis contends that we each acquire a mixed set of *should, oughts, and have-to’s* while still too young to process them. (COCA, written, 2008)
(カーニスは、あまりにもまだ若すぎて、それらを処理できない間は、私たちはそれぞれ「主観的にすべきこと」、「客観的にすべきこと」と「しなければいけないこと」を組み合わせたセットを身に着けるべきだと主張する。)
- c. “I don’t like my life,” and then we’d say, “Yeah, but that wouldn’t induce you to commit suicide. What else are you telling yourself?” And that’s when clients say things like, “It shouldn’t be the way it is. It’s terrible that I failed. I’m no good.” That’s when we hear *the shoulds, the oughts and the musts*, and then we convince the client to abandon these

irrational demands....

(COCA, written, 2001)

(...「私は自分の人生が好きではないんです。」それからこう言います。「そうですが、ですがそれが自殺に導くものではないでしょう。他に自分自身に言っていることは何ですか？」クライアントがこのように言った時がこれです。「ありのままであるはずがない。失敗するなんて最悪だ。私は役立たずでダメです。」これが、私たちが主観的にすべきこと、客観的にすべきこと、そして不可欠なことを聞いた時です。それからクライアントを訳のわからない要求を諦めさせるよう説得します。)

- (23) Dr-McGRAW: ... what I want people to do when you're in these relationships is stop using 'and start measuring it based on results. If it's working, you do it. If it's not, you don't. Measure 'shoulds' and 'must' and 'ought to's' what you're doing based on results....

(COCA, spoken, 2001)

(M: あなたがこのような関係にいるとき、私はみなさんに「主観的にすべきこと」、「自らに課すしなければいけないこと」、「客観的にすべきこと」を使用するのを止めてほしいのです。そして、事実に基づいてそれを評価してほしいのです。もし、それがうまくいくなら、それをしてください。そうでなければ止めてください。事実に基づいてみなさんがすることを判断してください。)

- (24) a. They were telling themselves, "I absolutely must be loved by the person I love or I am no good as a person." And I started pointing out their irrational demands and disputing their *shoulds* and *musts*, and some of them got remarkably better quite quickly.

(COCA, written, 2001)

(彼らは自分自身に言いました。「私は私が愛した人に愛されるべきである、そうでないと人として役に立たない」そして、私は彼らの分別のない要求を指摘しはじめ、彼らの義務と必須を議論しはじめました。そうすると、彼らの何人かはとてもはやくよくなり始めました。)

- b. Days I am dizzy with activity, and nights, dazed with exhaustion, I hunger for more *musts* and *have-tos*....

(COCA, written, 1996)

(活動でめまいがする日々、疲れでボーっとした夜、私はますます多くの「すべきこと」と「しなければいけないこと」を切望する。)

- c. Ask yourself, What are my needs and values? What factors in my life are nonnegotiable? What are *musts* for my happiness in life and at work?

(COCA, written, 2006)

(自分自身に尋ねてください。私の義務と価値は何なのか？私の人生において、譲れない要因は何なのか？人生と仕事で私にとっての幸せのために必須のものは何なのか？)

(17)から(24)の例から、各法助動詞の名詞形は Table 2 に示した根源的モダリティに分類されている機能を意味に反映させている。換言すると、(17)から(24)の例は各法助動詞が持つ核となる特性を意識の場に呼び起こすというようにメタ言語的に使用されている。そして(17)から(24)の例は、次の3つのタイプに分けられる。1. 法助動詞の名詞形を言葉の引用として用いる、2. 法助動詞の名詞形を使用して述べられたある条項などの引用として用いる、3. 法助動詞の名詞形が完全に名詞化している。これら3つのタイプに(17)から(24)の例を分類し直したものが Table 5 である。また Table 5 は、3タイプの統語パターンも記載している。

Table 5 法助動詞の名詞形の3タイプと統語パターン

タイプ	統語パターン	該当用例
1 言葉の引用	the + 法助動詞の名詞形 φ + 法助動詞の名詞形	(18a), (22c)
2 条項等の引用	the + 法助動詞の名詞形	(18b), (20a), (21a,b)
3 名詞化	a + 法助動詞の名詞形 φ + 法助動詞の名詞形	(17a,b), (19a,b), (20b), (22a,b), (23), (24a,b,c)

	所有格 + 法助動詞の名詞形
--	----------------

Table 5にあげたタイプ1とタイプ2のわかりやすい例を説明する。タイプ1に当てはまる(18a)の場合、shalls と shoulds は、リンゼイ・マリOTTが複数回使用した shall と should を shalls と shoulds で引用している。タイプ2に当てはまる(20a)の shoulds and should nots は、説教をする人が考える性的道徳という条項の義務と義務でないことの引用である。同様にタイプ2の(21a)の the ought は、結婚という出来事によって生じる客観的義務を示す。

(20),(22),(23),(24)の例が示すように、shoulds, oughts, musts は単独で用いられるよりも、‘shoulds and oughts’, ‘shoulds and should nots’, ‘shoulds and musts’, ‘shoulds and must and ought to’s’, ‘should/oughts/ musts and have-to’s’ (COCA では have to’s 単独の例が2例観察される)のようなパターンで観察される場合が多く、これらは、それらの頻度より do’s and don’ts のように定型表現として確立している。shoulds, oughts, musts がともに用いられるのは、意味的に類似した表現を繰り返し用いているだけでなく、各語のもつ機能が失われることなく構成された新しい定型表現である。

その定型表現として確立している(20b) your shoulds and your musts, (22a) shoulds and oughts, (22b) should, oughts, and have-to’s, (22c) the shoulds, the oughts, and the musts, (23) shoulds and must and ought to’s, (24a) shoulds and musts, (24b) musts and have-tos がどのような機能をするのか見ていく。should, ought, must, have to すべて「義務」の機能を持つが、誰による義務、何による義務なのか異なる。それを(25)にまとめた。

- (25) a. should, must 話し手がしなければならないと考える主観的義務
 b. ought to, ought, have to 周囲の状況、出来事からしなければならない客観的義務

この「主観的義務」と「客観的義務」を誰(addresser)・何(event, situation)から誰(addressee)に課されたものかをまとめたものが(26)である。

- (26) a. should addresser → addressee (話し手から受け手に対する主観的義務)
 b. ought to/ ought event, situation → addressee
 (出来事・状況から受け手に対する客観的義務)
 c. must addresser → addressee (話し手から受け手に対する主観的強制)
 addresser → addresser (話し手から話し手に対する主観的義務)
 d. have to event, situation → addressee
 (出来事・状況から受け手に対する客観的義務)

(26)に示すように、「義務」と一言で言っても、誰から誰に対する義務なのかは異なる。このような違いがあるため(20b) your shoulds and your musts, (22a) shoulds and oughts, (22b) should, oughts, and have-to’s, (22c) the shoulds, the oughts, and the musts, (23) shoulds and must and ought to’s, (24a) shoulds and musts, (24b) musts and have-tos のような定型表現が観察されると考える。

一例をあげると、(20b)の your shoulds and your musts の場合、「あなたがしなければならない義務」と話者が考える主観的なものである。(24a)の their shoulds and musts は、話者が考える義務と強制で主観的である。(24b)の musts and have-tos の場合、話者が自分自身に課す義務とそういう状況(めまいがする、ボーっとした夜)ながらもしなければならない客観的義務を指す。

上記の説明より、(17)~(24)で提示した法助動詞の名詞形の機能は(27)に示すとおりである。名詞形で用いられることにより、各法助動詞の名詞形はTable 2で示した根源的モダリティの特性を意識の場に呼び起こすメタ言語的機能を持つ。

- (27) a. coulds 能力
 b. shalls 推量

- | | |
|------------------------------|-------|
| c. a/the should/ shoulds | 主観的義務 |
| d. a must/ musts | 主観的義務 |
| e. ought to/ a ought/ oughts | 客観的義務 |

(27)より「義務」の機能を持つ名詞形が多数観察される。これは、昔から名詞用法として確立している *a must* の意味的な類推により、同じ機能を持つ法助動詞の名詞形が確立したと考える。しかしながら、(27)の「義務」を表している語は、(26)が示すように、誰・何から誰に対する義務なのかということが明確で、語によりどのような義務を表すのかきちんと棲み分けができています。

このことから、*coulds, shalls* のように意味的に誤解を与えず、かつ法助動詞の名詞形(過去形・複数形)の場合、その名詞形は各法助動詞の根源的モダリティの核となる特性を呼び起こしメタ言語的に使用されると言える。

3.2 a と the による違い

Table 4 で観察された名詞形(*should, must, ought*)が不定冠詞、定冠詞、もしくはその他のどれで使用されるのか調べた結果が Table 6 である。

Table 6 COCA, WB, BNC における「a+法助動詞の名詞形」、「the+法助動詞の名詞形」等の使用頻度内訳

法助動詞の名詞形	a+名詞形	the+名詞形	その他*	総数
<i>coulds</i>	0	2	5	7
<i>shalls</i>	0	1	0	3
<i>should</i>	2	0	0	2
<i>shoulds</i>	0	18	30	48
<i>must</i>	1505	5	0	1510
<i>musts</i>	0	6	70	76
<i>ought</i>	0	6	0	6
<i>oughts</i>	0	3	28	31

*その他とは、無冠詞もしくは所有格+名詞形のことを指す。

Table 6 より、単数形 *must, should* の頻度は「a+法助動詞の名詞形」>「the+法助動詞の名詞形」であるが、それ以外の法助動詞の名詞形の使用頻度は「the+法助動詞の名詞形」>「a+法助動詞の名詞形」となっている。

a should, a must のように、「a+法助動詞の名詞形」は文中で初めて話者が言及する義務であり、「a+法助動詞の名詞形」が初出の場合でも何ら意味の誤解を与えない。*a must* はその用法がすでに広く知れ渡っているので、*a must* 単独で使用される。しかし(19a)の *a should* は、前方に *a want*, (19b)は *a should* の後方に *a must* が観察されるなど単独で文中で初めて話者が言及する義務を表すものとしてまだ確立しているとは言えない。このため、類似の表現が観察される。つまり Table 5 で示した通り、「a+法助動詞の名詞形」の場合、法助動詞は完全に名詞化している。

一方、(21)の *the ought* (結婚により作り出された義務)は、Table 5 で示した通り条項等の引用であるから、一度言及された義務「the+法助動詞の名詞形」で示している。このように、一度言及もしくは引用されたものを表す場合、その法助動詞の名詞形を意味的に誤解を与えずに伝えるために、*a* ではなく *the* とともに使用されると考える。つまり、「the+法助動詞の名詞形」は名詞形へと発達段階中であると言える。

Table 6 より、複数形の法助動詞の名詞形は、圧倒的に無冠詞もしくは所有格とともに用いられる。両者の場合とも、複数形で使用されていることから完全に名詞化している。法助動詞の名詞形の意味的帰属を明確にする場合、所有格が用いられる。

3.3 レジスター、アメリカ英語、イギリス英語調査

本節は、観察された法助動詞の名詞形が *written* と *spoken* のどちらのレジスターで使用されているのか、アメリカ英語(AmE)とイギリス英語(BrE)のどちらでより多く観察されるのか調べた。

Table 7 レジスターごとによる法助動詞の名詞形の割合⁹

	written	spoken
coulds	0.000001	0.000002
shalls	0.0000006	0
a should	0.0000004	0
shoulds	0.000009	0.000002
a must	0.003	0.0001
musts	0.00001	0.000002
a ought	0.000001	0
oughts	0.000006	0.000002
ought to's	0	0.0000008
合計	0.003	0.0001

先行研究の記述で、*a must* は新聞用語とあったが、Table 7 が示すように、法助動詞の名詞形は書き言葉で使用されることが多い。Table 7 のうち使用頻度が多い *shoulds*, *a must*, *musts* の COCA におけるレジスターごとの頻度を調べた結果、*written* > *spoken* という順番になった。これは、*SOD*⁶ で *musts* は colloq. で用いられるという記述が当てはまらないことを示している。

次に、英米における法助動詞の名詞形の数をまとめたものが Table 8 である。

Table 8 アメリカ英語とイギリス英語ごとの法助動詞の名詞形の数と割合¹⁰

	BrE (%)	AmE (%)
coulds	1 (0.0000006)	6 (0.0000001)
shalls	1 (0.0000006)	2 (0.0000004)
a should	1 (0.0000006)	1 (0.0000002)
shoulds	10 (0.000006)	38 (0.000008)
a must	501 (0.0003)	1009 (0.0002)
musts	16 (0.00001)	60 (0.00001)
a ought	2 (0.000001)	4 (0.0000008)
oughts	9 (0.000006)	22 (0.000004)
ought to's	0 (0)	1 (0.0000002)
合計	541 (0.0004)	1143 (0.0002)

*OED*² の記述とは異なり、法助動詞の名詞形はアメリカ英語とイギリス英語の両方で観察される。

3.4 主要法助動詞と周辺の法助動詞

Table 9 は、主要法助動詞と周辺の法助動詞ごとの名詞形の数を表したものである。

Table 9 主要法助動詞と周辺の法助動詞の名詞形の数

主要法助動詞 (%)	周辺の法助動詞 (%)	合計
1646 (97.7)	38 (2.3)	1684

Table 9 より、主要法助動詞のほうが圧倒的に名詞形として使用されることがわかる。これは、Table 3 より周辺の法助動詞は種類が少ないこと、対応する過去形や名詞形が少ないことに起因していると考えられる。

4. 周辺の事象

本節は、準法助動詞と言われている *have to's* とコーパスに観察された名詞形 *maybes, haves, haves and have not's, want to's* が名詞用法を持つことを述べる。

4.1 準法助動詞 – *have to's*

Jenkins (1972)によると、*have to* の認識的モダリティは「義務」の機能を持ち、その機能が *have to's* として使用された時にも反映されている。*have to's* は COCA で 2 例のみ観察され、BNC, WB では観察されなかった（用例の訳は省略）。

- (29) a. Well, it's time to get moving! Here's why: When your day-to-day existence gets packed with too many "*have to's*" and not enough "*want to's,*" you can end up with a constant, low-grade "Is this all there is?" kind of fever.... (COCA, written, 2007)
- b. MR-PETERSON: Every event becomes a little more important, every holiday, because you don't know if you're going to have another one. You sort of start out thinking, you know, what are the minimums, what are, you know, what do I have to do, and one of the *have to's* was to make it to get Mark out of high school. (COCA, spoken, 1990)

(29)の *have to's* は「しなければいけないこと」という意味で名詞化している。(29a)の場合、名詞化した *want to's* (したいこと) も観察される。

4.2 その他

COCA, BNC, WB で観察された名詞形とその頻度を Table 10 にあげる。(30)は *maybes*, (31)は *haves and have nots*, (32)は *the haves and the have nots*, (33)は *haves*, (34)は *have nots*, (35)は *ifs, buts, ands* の例である。*want to's* については(29a)を参照されたい。すべて名詞化している。また、各例の訳は省略する。

Table 10 COCA, BNC, WB で観察された名詞形とその頻度数

	COCA	BNC	WB
<i>maybes</i>	53	6	6
<i>haves</i>	588	45	36
<i>have nots</i>	73	0	0
<i>haves and have nots</i>	16	0	0
<i>the haves and the have nots</i>	11	0	0
<i>want to's</i>	1	0	0
<i>ifs</i>	506	53	54
<i>buts</i>	182	47	38
<i>ands</i>	120	12	12

- (30) "We were in East Texas, "his ex-wife Josie Odoms said of the day of the crime." That is the only thing that I know and stake my life on. There's no *ifs* and *maybes* about it.... (COCA, written, 2007)

(30)の *maybes* は「かもしれないこと」を意味し、名詞化している。

- (31) As Republicans our first concern is for those waiting tonight to begin or resume the climb up life's ladder. We do not accept that ours will ever be a nation of *haves and have nots*. We must always be a nation of haves and soon-to-haves. (COCA, written, 2012)
- (32) SCOTT-PELLEY: Another thing facing the country right now is income disparity. There has never been a wider gap between *the haves and the have nots*. How do you see that? (COCA, spoken, 2011)

(31), (32)の例が示すように、*haves* と *have nots* は *haves and have nots* の塊として使用されることが多く、*gap/ difference etc. between haves and have nots* のパターンが観察される。*haves and have nots* の意味は「恵まれた人とそうでない人」である。(33), (34)が示すように、*haves, have nots* もそれぞれ「裕福な人、恵まれた人」と「貧乏な人、恵まれていない人」の意味である。

- (33) And you and I, Mister Stein, are extremely lucky to be paid for a subjective asset: our talent. I have always understood that the "*haves*" were greedy. (COCA, spoken, 2010)
- (34) Indeed, in the form of sharing which is the most commonly practiced among hunter-gatherers, and which has been called "demand-sharing" (Peterson 1993), the "*have nots*" demand that the "*haves*" share with them. That is to say, the "*have nots*" are not passive recipients; on the contrary, they initiate the giving and, in a sense, orchestrate it. (COCA, written, 2008)

(35)は *ifs, buts, ands* の例であるが、これらの名詞形は単独で使用されるよりも(35)に示すように、*no ifs, ands, or buts* のようにフレーズで使用されることが多く、意味は「言い訳無用」が適切かと思う。

- (35) a. HAMMER: Moving on tonight, there's more SHOWBIZ trending on SHOWBIZ TONIGHT. Here's what's coming up at the bottom of the hour. It's the great royal rump debate. Did Pippa Middleton pad her butt for the royal wedding? Some are saying there are no *ifs, ands or buts* about it. And the big Kardashian wedding countdown is on. (COCA, spoken, 2011)
- b. Snoot sat down gratefully. Had room to think in the woods, "he said, 'and I can tell you this, no *ifs, ands, or buts*: Frounce was the best big-bosomed redheaded woman ever put on God's green earth" - he spoke to the ceiling - 'and that's the truth of it. (WB, written, 1990)

5. 結語

本稿は、数量的、質的にどの法助動詞が名詞用法を持ち、そしてどのような機能を反映させているかを明らかにした。その結果、根源的モダリティの機能が法助動詞の名詞形として使用されることを述べた。その場合、法助動詞の名詞形は法助動詞が持つ根源的モダリティの核となる機能が意識の場に呼び起こされるメタ言語的に使用されることをも述べた。そして、コーパスに観察された法助動詞以外の単語の名詞形をも取り上げた。その場合も、各語の主たる機能が意味に反映されている。このことから、本稿が取り扱ったような現代英語に観察される興味深い現象は、文法という枠組みを超えて、一定の規則性を保ちながら発達していることがわかる。

Notes

- 1 後続に何の要素も従えないものを指す。
- 2,3 Aarts (2011)の用語を採用。
- 4 ここでは代表的な研究をあげるにとどめる。von Wright (1951)は、論理的な観点からモダリティを5つに分類している。真理的(*alethic*, 必然性や可能性にかかわるもの), 認識的(*epistemic*, 確実性にかかわるもの), 束縛的(*deontic*, 義務や許可にかかわるもの), 存在的(*existential*, 存在性にかかわるもの), 力動的(*dynamic*, 能力や性向にかかわるもの)の5つである。Hofmann (1976)は *root* と *epistemic*,

- Halliday (1970)は *modulation* と *modality*, Ota (1972)は *cognitive* と *epistemic*, Close (1975)は *primary* と *secondary*, Quirk *et al.* (1985)は *intrinsic* と *extrinsic* の用語を用いて区別している。Palmer (2001)は、モダリティを事象的 (=根源的) と命題的 (=認識的) の2つに分類している。
- ⁵ このような分類法を採用する代表的な研究として、Hofmann (1966), Perlmutter (1970), Jackendoff (1972), Ota (1972), Jenkins (1972), Coates (1983), Davidsen-Neilsen (1990), Sweetser (1990), Declerck (1991), Langacker (1991), Brennan (1993), 澤田(1975,1993), Sawada (1995), Westney (1995)などがある。
- ⁶ COCA には2014年2月16日、19日にアクセス、BNC, WB には2014年2月19日にアクセスした。
- ⁷ *could* のような単数形は、*a/the could* の両方の検出数である。また、名詞形の否定形は、肯定形と比較すると使用頻度が極端に少ないので数には入れていない。否定形は用例として提示する。
- ⁸ 引用実詞(*quotation substantive*)とは、Jespersen (1913)の中で本来は実詞 (=名詞) ではないが、実詞として扱われる語句のことであり、必ずしも引用符があるとは限らない。Love played at catch-me-if-you-can (恋愛は追いかけてごっこ遊びである) のようにハイフンで単語を連結する場合もある。
- ⁹ 書き言葉の総語数は508,056,986、話し言葉の総語数は120,583,410である。
- ¹⁰ イギリス英語、アメリカ英語の総語数は、それぞれ153,138,713、470,513,833である。

Corpora

BNC: British National Corpus

COCA: the Corpus of Contemporary American English

WordBanksOnline

Dictionaries

*CALD*⁴: *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 4th edition. 2013. Cambridge: Cambridge University Press.

*LDCE*⁵: *Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th edition. 2008. London: Longman.

*MED*²: *Macmillan English Dictionary*. 2nd edition. 2007. Oxford: Macmillan Education.

*OALD*⁶: *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 8th edition. 2010. Oxford: Oxford University Press.

OED: *Oxford English Dictionary*. 1928. Oxford: Oxford University Press.

*OED*²: *Oxford English Dictionary*, 2nd edition. 2009. CD-ROM version 4.0. Oxford: Oxford University Press.

*SOD*³: *Shorter Oxford English Dictionary*, 6th edition. 2007. CD-ROM version 3.0. Oxford: Oxford University Press.

References

Aarts, B. 2011. *Oxford Modern English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Brennan, V, M. 1993. "Root and Epistemic Modal Auxiliary Verbs." Doctoral dissertation submitted to University of Massachusetts.

Close, R.A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

Davidsen-Neilsen, N. 1990. *Tense and Mood in English: A Comparison with Danish*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Halliday, M.A.K. 1970. 'Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English.' *Foundations of Language*. 6, pp.322-361.

Hofmann, T.R. 1966. "Past tense replacement and the modal system" *National Science Foundation*. 17-VII, 1-21.

- Hofmann, T.R. 1976. 'Past tense replacement and the modal system.' *Syntax and Semantics*. 7, 85-100.
- Inoue, A. 2012. 'A study of complex prepositions – “be on against” as an example' Presented at European Society for Phraseology 2012 Maribor (8/23-27/2012).
- Inoue, A. 2013a. 'Newly observed phraseological units in present-day English: the example of *be in and out*' *Lexicography and Dictionaries in the Information Age* (Selected papers from the 8th ASIALEX International Conference), pp.145-150.
- Inoue, A. 2013b. 'A study of a recent trend from a phraseological perspective observed in contemporary English' Presented at 5th International Conference on the Linguistics of Contemporary English. (9/25-30/2013)
- 井上亜依. 2013c. 「現代英語に観察される進化する新しい定型表現とその実態—融合形 *in and of itself* と派生形 *in and of* を例として」 *JASEC BULLETIN* (日本英語コミュニケーション学会) No. 22, Vol.1, pp.1-15.
- 石橋幸太郎. (編.) 1966. 『英語語法大事典』東京：大修館書店.
- Jackendoff, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. U.S.: MIT Press.
- Jenkins, L. 1972. "Modality in English Syntax." Doctoral dissertation submitted to Massachusetts Institute of Technology.
- Jespersen, O. 1913. *A Modern English Grammar on Historical Principles PART II SYNTAX*. London: Allen & Unwin.
- 小西友七. (編.) 2006. 『現代英語語法辞典』東京：三省堂.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: Chicago University Press.
- Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. vol.1. U.S.: Stanford University Press.
- Ota, A. 1972. "Modals and some semi-auxiliaries in English." *The ELEC (English Language Education Council) Publications* 9, 42-68.
- Palmer, F.R. 2001. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F.R. 2003. 'Modality in English: Theoretical, descriptive and typological issues.' In Facchinetti, R., M.Kung and F. Palmer (eds.) *Modality in Contemporary English*. Berlin: Mouton de Gruyter, 1-17.
- Perlmutter, D. 1970. "The two verbs *begin*." In Jacob, R. A. and P.S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. U.S: Blaisdell Publishing Company, 107-119.
- Quirk, R., S. Greenbaum. G. Reech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 澤田治美. 2006. 『モダリティ』東京：開拓社.
- 澤田治美. 1975. 「日本語主観的助動詞の構文論的考察—特に『表現性』を中心として—」『言語研究』68, 75-103.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性』東京：ひつじ書房.
- Sawada, H. 1995. *Studies in English and Japanese Auxiliaries: A Multi-Stratal Approach*. Tokyo: Hitsuji Syobou.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- von Wright, G.H. 1951. *An Essay in Modal Logic*. Netherland: Amsterdam.
- Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastic in English*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.